

清末小説目録の最新成果

劉永文編『晚清小説目録』について

樽本照雄

『清末民初小説目録』（樽目録）の増補訂正を私は今も続けている。中国において特色のある目録が出るたびにそれらと比較対照し不足分を増補するという作業だ。王継権、夏生元『中国近代小説目録』（南昌・百花洲文藝出版社一九九八）は、創作小説のみを収録する。翻訳作品は無視したが、私は点検を行なった。新編増補版（済南・齊魯書社二〇〇二）を刊行してからも同様だ。日本では中国の新聞、雑誌、原本を見ることがほとんどできなかったから二次資料に頼らざるをえない。陳大康『中国近代小説編年』（上海・華東師範大学出版社二〇〇二）は、一八四〇年から一九一一年までの創作と翻訳を年表形式で収録する。こちらも取り入れた。該当作品が出てくるペーヂ数を明記して後の検索に備える。このくり返しである。

孟兆臣『中国近代小報史』（北京・社会科学文献出版社二〇〇五）を入手したときには驚いた。一八四〇・一九四九年の新聞に掲載された小説を丹念に採取して詳細だ（孟目録）。下篇の「中国近代小説目録初編」（二五九・六七三頁）がある。樽目録と比較対照し未収録の作品を追加したのはいうまでもない。清末民初部分に限定してあらたに追加したのは八五二件である。ただし、不可解なことがある。孟目録が、影印本で刊行された新聞は収録対象外にしているのだ。『申報』『大公報』『民国日報』『盛京時報』などを指す。また、杜慧敏『晚清主要小説期刊訳作研究』（一九〇・一九一）（上海世紀出版集団上海書店出版社二〇〇七）も見た。樽目録を参照したとある。

劉永文『晚清小説目録』の刊行予告が出た。私がすぐさま購入予約（二冊も）をしたのはいうまでもない。書名がそのままズバリ『晚清小説目録』である。原物が届くまで、いろいろ想像して楽しんだ。樽目録が出たあと上記のようにいくつか小説目録が刊行されている。それらを視野に入れると、決定版として出現するのではないか。つまり、私が考える決定版小説目録とは、それ以前のものとはまさに根底から異なる種類のものだ。日本で編集することができるのは二次資料にもとづいた目録でしかない。はたして正確かどうかもわからない。「ないよりマシ」というのが私の編集方針だから、率直にいつて誤りも多い。ほかならぬ中国で刊行されるというのが私の期待を大きくする。以前の欠点を克服した決定的な晚清小説目録とは、実物の書籍を手元において正確に記述するものだ。初版、再版を含めて実物だけに徹底的にこだわる。もしかしたら所蔵機関がそれぞれに注記してあるかもしれない。翻訳小説には、私の知らない原著者と原作名が明記されているのではなかるつか。これこそ信頼できる小説目録だ。日本であやふやに編集した目録など一瞬にして価値を失うだろう。長年にわたった目録の増補作業から私が解放されることを意味する。どのみち中国人研究者であることの強みが発揮された目録に違いない。

日本という外国では、どうしてもできない種類の目録こそが中国の研究者によって編集刊行されるだろうという私の強い思いがあった。

中国人研究者にとっては自国の小説研究だ。小説目録に関して、外国人の後を追いかけるなど

という事態は想像もできないだろうし、したくもなからう。

劉永文編『晚清小説目録』（上海世紀出版股份有限公司、上海古籍出版社二〇〇八）が届く（劉目録）。うれしかった。日本でいうA5判で全部あわせて八八二頁もある巨冊だ。これにも驚いた。

劉永文といえば、新聞小説について複数の論文を発表していることを私は知っている。

その中のひとつは『神州日報』が小説の宝庫であることを紹介する（二〇〇五）。該論文によって樽目録に三三件の小説を追加した。

基本となる工具書は、いくらあってもよい。用途によって使い分ければよい。中国の研究者といてもいろいろの人が存在する。先行文献を引き写して林紓に濡れ衣を着せることに熱中している研究者に比較すれば、劉目録はどれだけ有用な仕事であるか、いう必要もないだろう。今後の研究に貢献する度合いは、比較にならない。

劉目録の構成は、大まかにいうと小説目録、媒体についての説明、小説年表、索引の部に分かれる。主体の小説目録は、新聞、雑誌、単行本に分類する。収録した数の多さに目が引かれる。さすがに新聞小説を中心に研究を続けている劉永文である。詳細な記述になっている。

まず「前言」から紹介しよう。

いきなり樽目録に言及がある。阿英『晚清戯曲小説目』と前出の王繼樞ら『中国近代小説目録』にならべて樽目録が掲げられる。私は予想もしなかった。光栄に感じて部屋をなかを行ったり来たりしたほどだ。阿英目録は、いつまでもなく清末小説の基本工具として著名だ。単行本を中心に据え、雑誌から少し収録した。「創作之部」と「翻訳之部」のふたつにわけたのが特色といえるだろう。翻訳を重視する阿英の見識が示された好例である。増補版である中華書局版の刊行が一九五九年だ。中華人民共和国成立一〇周年を記念するものであるならば、劉目録は中華人民共和国成立六〇周年の一年前に出版された。阿英の晚清小説目より約半世紀が経過している。阿英の該書が一七八頁だったからこの五〇年間で劉目録は約五倍に増大した。

劉永文は、樽目録には多くの誤りがある、と指摘する（二頁）。しかし、そこに示された著者の間違いは四件にすぎない。その少なさに驚いた。例としてあげただけで、隠れた誤りが多いと書きたかったのだろう。樽目録に収録された北京地区の新聞小説は一二〇篇だそうだ。著者、発行所、年などを具体的に示している（それだけで六頁と四分の一を費やす）。劉永文『清末民初報刊小説目録』（未刊）では北京だけで一一三篇あるという。「少なくともすいません」とあやまるほかない。劉永文は、樽目録の九八一頁すべてに目を通して上の一二〇篇を抽出したとみえる。その一二〇篇は、もとはといえば先行する中国人研究者の研究成果に基づいている。研究環境の問題もあり先人は新聞小説にそれくらいの関心しか示さなかったという事実の反映にすぎない。劉永文は後発の有利な立場に立ち、研究環境の変化を考慮せず、外国の樽目録一二〇篇を利用して自国の先輩を非難した。利用したとはいえ、そこまで樽目録を貶めているのだから、劉目録は小説を採取して厳密であることに自信をもっているのだろう。新聞小説でこれだ。私の知らない単行本を大量に教えてくれるのではなからうか。劉目録に対する好奇心がいやがうえにもふくらむ。

ただし、違和感がどうしても残る。外国人が作成した目録を大きな紙幅を取って批判することへの感覚的不均衡である。なぜそこまで樽目録を罵らなくてはならないのだろうか。どこか腑に

落ちない。一二〇篇が少ないというのは、たぶん事実だ。しかし、現在は誰も見ることでできない劉永文の『清末民初報刊小説目録』と比較されてもなァ、という気持ちがある。劉永文の厳密な書き方からして、新聞を基本に追跡しながら清末小説全体についても当然広く収集し精密に記述しているだろう。そう考えるのが普通だ。だから、少しの違和感を持ちながら私は手元の劉目録に注目したのである。

劉永文が「前言」のなかで指摘する研究の一般的な欠点は、つぎの二点だ。

ひとつは、「研究者が論文を書くときにみんな二次資料を利用するのだが、深く緻密な資料整理という仕事をやりたがらない」（四頁）こと。もうひとつは、旧暦と新暦の変換に間違いがあること（五頁）。このふたつともに劉永文の指摘は正しい。そうであるならば、劉は単行本についても（初版、再版、三版などまでを記載するなど）詳細に記録しているだろう、と私は推測した。説明によると新聞小説は一二三九篇、雑誌小説は一一四一篇、単行本小説は二五九三部だという私は、劉目録について作品の一つひとつを点検しはじめた。

新聞小説部分は、すばらしい。詳しい部分が続出する。その努力と厳格な姿勢にまず敬意を表したい。さすがに新聞小説を主にして研究していて蓄積がある。小さな疑問を出しておく。『図画報』は珍しい。だが、これを収録するだけで作品別に整理していない。各期の目次を並べるのみ。別の新聞と扱いが異なる（二〇八・二七頁）。

雑誌掲載部分において、私の知らない雑誌が収録されており貴重だ。たとえば、『時事画報』、『北清煙報』など。

劉目録の全般にいえることだが、連載開始の月日だけあげて終了日時を示さないものがある。小さいが気になる。

また、『繡像小説』の終刊をあいかわらず「至一九〇六年四月（光緒三十二年三月）」（二七頁）とする。私は、すでに二〇年前からそれが間違いだと主張しているのだが認知されていないらしい。最近では、夏曉虹「晚清報刊広告的文学史意義」（『南京師範大学文学院学报』二〇〇八年第四期）が書かれている。新聞広告の有用性を強調して注目される。それには『繡像小説』の刊行遅延にも言及している。夏論文は新しすぎて劉目録には間に合わなかったということもあるう。ならば、文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」（『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』二〇〇六年第三期）がある。劉永文は新聞を中心に研究を進めてきたから雑誌は二の次になったのかもかもしれない。

「単行本小説目録」に入る。こちらにも記載が詳細であるのがいやおうなく目に入る。たとえば、商務印書館「説部叢書」の「集」と「編」を明記している。珍しいということができる。しかも、細かな区別をつけているように見える。一例だけ示せば『盜窟奇縁』（二三三頁）だ。ひとつには「説部叢書九集三編」と記し、別のひとつには「説部叢書一集83編」と区別している。劉永文は、この「九集三編」と「一集83編」がどう関係にあるのかについて説明しない。なぜだろう。

また、『文明小史』の南亭亭長に「李伯元？歐陽鉅源？」と示す（三四二頁）。なぜ「？」がついているのだろう。

点検作業を進めていくうちにどこかで見たことがあるような気がしきりにする。なんだったか。なじみの書き方に違いない。決定的になったもつひとつをあげよう。『小五義伝』(三五一頁)に「愛知大学図書館」とある箇所がみつかった。中国の目録になぜ日本の大学図書館が突然出てくるのか。わかってしまえばなんということはないのだ。それらは私の『清末民初小説目録』にほかならない。

上記の「説部叢書」について説明しよう。樽目録は、「説部叢書九」³と「説部叢書一」⁸³に区別して表示した。「説部叢書」の改組があったことを反映させるためにわざわざ書き分けた私の工夫である。樽目録以外にそのように区別している目録はない。それを劉目録はそのままなぞった。

劉目録の単行本部分についていえば、基本的に樽目録をまるごと写しただけ。しかも、翻訳については原著者、原作など研究成果を盛り込んだ箇所は削除している。大規模でありながら不完全な複写だといわなければならない。ならば、単行本部分については樽目録を見る方がよい。

劉永文は、「前言」において樽目録の新聞小説部分が不十分であることを強調した。私が感じた感覚的不均衡である。つきつめれば、単行本部分が樽目録を複写して成立した事実を隠蔽するために、ことさらに強調したような気がする。後ろめたかったのだろう。それにしても、劉永文自身が「多くの誤りがある」と批判したあの樽目録をここまで大規模かつ不完全に写したというのはいかなるものか。

劉目録について私が行なった点検数は五〇六七件である。以前に、劉徳隆ら各氏からのご教示、孟目録などで増補をすでに行なっている。結局のところ劉目録からは六九一件の追加となった。大多数が新聞掲載の作品となる(単行本の例外は一件のみ。『女総会』を追加した。『笑林報』の広告によるのだそう)。ただし、該作品がはたして刊行されたかどうか不明)。つまり、樽目録の不足は新聞からの採取が少ないという事実をあらためて明らかにした。いわれるまでもなく私はそう理解している。だから、そのように自分で説明もした。劉目録はその点で増補の役にたったということが出来る。

劉永文は「前言」において、資料整理をやりたがらないほかの研究者を批判した。批判したそのご本人が、「単行本小説目録」について樽目録という二次資料を写すとはどういうことだろう。右から左に、しかも恣意的になぞることは、整理することとは違うだろう。手抜きである。もつひとつ、旧曆新曆問題だ。劉永文は、新曆で統一しようだが、旧曆のまま放置している箇所がある(『通俗日報』一八七、一八九頁ノ『醒世画報』一九九頁)。いずれも劉自身のことばを裏切る行為だ。

あとは簡単に触れる。

「晚清小説年表」は、月日まで明らかにして詳しい。ただし、掲載紙誌、出版社を記載せず。作品があるとわかるだけ。

小説索引は、新聞、雑誌、単行本に分けてそれぞれ別個に作成してある。この三種類を統合できなかつたのか。利用者からすれば、作品について検索を三回くり返さなくてはならない。不便に感じる。研究者ならばそれくらいの努力をいやがるな、という親切心かもしれない。人名索引

がないのは、その延長線上にある教育的配慮ではないか。全ページを丹念に見て対象の作家を拾って行け、という考えだ。樽目録のように人名索引をつけたのでは、研究者にラクをさせてダメにしてしまう。これこそ究極の親切心だと一瞬思った(まさか)。特定の小説家がどのような品を書いたのかを追跡しようにも、これでは検索することが困難である。「単行本小説索引」は必要ではない。なぜなら、単行本小説部分のもとから中国現代音の a b c 順に配置されているからだ。

結論に近づいてきた。

中国で本格的な清末小説目録が出版されたならば、私は編集作業を中止すると前から言ってきた。だが、そうはならないようだ。劉目録は単行本についての新発見をまったく提供してくれなかった。翻訳については、原著者、原作名も注記していないとか写してもいない。現在まで明らかになっている研究成果まで無視している。劉永文にとっては荷が重かつたらしい。翻訳作品に関しての該目録は一步後退している。その意味では、劉目録の「単行小説目録」部分(二一八・三九一頁)は本来が不必要である。

誤解のないようにお断わりしておく。私は劉目録全体を批判しているのではない。期待が大きかっただけに、不十分な箇所が目が行ったにすぎない。清末小説の研究は、それくらい困難をとまなうといいたただけだ。

考えるのだが、劉永文が作成したという『清末民初報刊小説目録』を出版したほうがよほどよかった。絞り込んだ特色のある目録になっただろう。『晚清小説目録』になぜ無理をして拡張したのか、その理由が不明である。思い当たるといえば、新聞小説目録ではすでに出版されている孟目録と完全に重複するからだろう(そういえば劉永文は、先行する孟兆臣の著作について一言も触れていない。無視するにもほどがある)。

利用者からいえば、新聞小説については孟目録と劉目録を併用する。単行本に関しては樽目録を見る。そのように活用するのが適当だ。

最後に、劉目録に対する評価である。

新聞小説部分は、半歩前進とする。一步前進ではない理由は、孟目録が先行して存在しているからだ。単行本部分は樽目録を写しただけだから一步後退。また、翻訳部分の研究成果を写していないからこれも一步後退。プラス半歩、マイナス二歩だ。以上を総合すれば一步半後退ということになってしまふ。

劉永文を声援するつもりでこの文章を書きはじめたのだが、これでは声援したことにならないか。

(たるもと・てるお 大阪経済大学)